

仕事楽しい人 F i l e . 5 3 : 渡辺美紀さん (診療放射線技師)



◆疑いを確信に変えるのが、放射線技師の仕事

今回ご紹介する53人目の仕事楽しい人は、
診療放射線技師の渡辺美紀さんです。

レントゲン検査で、
「息を吸って、はい止めて、そのまま」
チッチッチと数秒経過した後、
「はい、終了しました」

お腹のエコー検査では、
「ズボンをおへその下までおろしてください」
「ゼリーを塗らせていただきますね」
「はい、それでは検査を始めます」
「お腹を大きく膨らませてください」
「そこで、息を止めて」
パシッ。

胃のバリューム検査になると、
「それでは、お腹を膨らます粉を飲んでいただきます」

「検査が終わるまでゲップはしないようにしてくださいね」
（心の中で）「そんなの無理でしょう」
なんて思いながら検査が始まります。

このように、私は、放射線技師の仕事に、
“患者さんの息を止めて患部の映像を撮る”
こんなイメージを持ちつつ取材をはじめました。

渡辺さんから放射線技師の仕事の実際を伺い、最初に私が、なるほどと勉強になったのは、
健康診断で異常が発見される確率は極めて低い
という事実を教えていただいたこと。

異常が発見されるのは、体調不良の自覚症状が出ての受診。
例えば、
ひどい咳が続いた場合には、肺炎の疑いがあるので、
胸部レントゲンの撮影をする。

右手が動きにくい、ろれつが回らない症状では、
脳のMR I 検査で、脳梗塞がないかどうか確認する。

このように、
お医者さんの診たての裏付けを取るために放射線検査をする。

私の実体験に照らすと、
右手の握力が異常に低下してしまい、不安を抱えながら整形外科に行くと、
ドクターがいきなり私の頭を手で押さえて右側に曲げると、私は、
「イタタタ、先生、物凄く痛いんですけど」
と絶叫。
するとドクターが、
「頸椎症の疑いがありますので、こちらの病院で首のMR I 画像を撮ってきてください」
と診断し紹介状を書いてくれました。
MR I 画像を確認すると、私の頸椎の4番と5番の間がつぶれていました。

「お見事、さすがにプロ」
と言っでは、お医者さんに失礼ですが、この時私は、このように感じました。

ここで、重要なことに気づきます。
プロのお医者さんの診たてを確かなものにするには、
放射線検査が不可欠であるということ。

疑いを確信に変えるのが、放射線技師の仕事なのです。

このような思考を巡らせていると渡辺さんから、
「平堀さん、とは言うものの健康診断は必ず受診してくださいね」
「自覚症状がない状況で検診を受けた場合、ほとんど異常がないという私の話を真に受け
て、健康診断は受けなくていいなんて思わないでくださいよ」
「早期発見、早期治療が、病気を治す最善策なんですから」

と、私の心の中を“見透かす”ように指摘されてしまいました。

このあと、放射線技師の仕事の苦勞とやり甲斐について、
“渡辺さんが発するプラスのオーラ”にてご案内します。

◆渡辺さんが大切にしているキーワード

家族と思って患者さんと接する

患者さんには、自分が大切に思う家族と同様に接することを心掛けています。

◆渡辺さんのパワー○○

ライブハウスで音楽を聴く

ライブハウスは小さい方が好みです。ミュージシャンと一体感を持って演奏を聴くと、
ストレス発散になります。

◆渡辺さんのコツコツ

日記

短大入学以来、15年くらい継続しています。

たまに読み返してみると、自分の生き様がわかり面白いです。

成長しているなと思える自分と、していない自分が垣間見られます。

◆渡辺さんが発するプラスのオーラ

渡辺さんは新人時代、
手首や膝などの関節のレントゲン写真を撮るのが苦手で、

骨と骨の間も含めて、ドクターが診たい患部全体を要求通りになかなか撮影できず、
「誰だ、この写真を撮ったのは」
と、ときどき叱られたそうです。

「見えない患部を撮るのが私の仕事なのですが、患部は撮影しないと見えないので、
立体感覚が備わっていないのか、諸先輩方のように上手に位置出しができませんでした」
と、渡辺さん。

「こんなこともありました。肘関節の撮影をしようと、患者さんの肘を伸ばしながら、撮
影位置の調整をしていると、患者さんから「イタタタ、そんなに肘を伸ばしたら痛いじゃ
ない！」と文句を言われてしまいました」

短大で診療放射線技師の実習を重ねていた時も、
機械操作がそもそも苦手で、どうしていいものやらちんぷんかんぷんな自分を、
この仕事には向いていないのではと思ったそうです。

ところが、大けがをした患者さんが実習先の病院に救急で運び込まれて、
ドクターと看護師、そして、放射線技師たちが連携して対処している様子を目の当たりに
した渡辺さんは、まったく違う感覚に襲われます。
ドクターの指示の下で、患者さんの命を救うために一体となるスタッフチームに、
渡辺さんは感動したのです。

渡辺さんが、心の底からこの仕事は凄いと感えた瞬間です。

そして、大けがをした患部を見ても冷静でいられる自分にも気づきました。
(TVで手術のシーンが映ると私は思わず目を背けてしまいますが、渡辺さんは、まった
く平静で見られるそうです。)

こんな思い出話をしながら渡辺さんが語ったつらい出来事は、
「心電図を撮り心筋梗塞だと判明した患者さんに、ドクターが緊急のカテーテル手術をす
ると伝えると、患者さんが明日にすると頑なに言い張り自宅に帰ってしまいました。する
と、この患者さんはその晩に発作を起し他界されてしまったんです。私もさることながら、
この時のドクターの落胆ぶりは、今でも、脳裏に焼き付いています」。

「せっかく、患部を特定して確実な処置方法も確定できたのにとの思いで、心が押しつぶ
されそうになりました。もちろん、こんな事例は滅多にないのですが」。

この話を聞き私も切ない気持ちになりだすと、渡辺さんが一言。

「平堀さん、私が先にお伝えした自分の特徴（手術の縫合シーンを見ても冷静でいられる）に加えて、もう一つ、この仕事に向いているなと思える自分の性質があるんです」。

私が「それは何ですか？」と興味津々に尋ねると、

「それは、楽天的なところですよ」

と、渡辺さんがニコリとしながら答えました。

楽天的、明るい、ネアカ・・・

こう言われてみて、私は合点がいきました。取材中に、渡辺さんからつらかった経験を先の事例以外にもいくつか伺ったのですが、何故か重苦しい雰囲気にならなかった。それは、渡辺さんの生来の明るさにあると納得できたからです。

医療関係の仕事は、人の命と向かい合わせになる、ある意味シビアな世界。そして、病気になると、人の気持ちは塞ぎ込むものです。病は気からではありませんが、必要以上に気分が落ち込んでしまっは、よくなる病気も快方に向かいませぬ。こんな環境下なので、“明るさ”は患者さんの救いの手になるはずですよ。

渡辺さんは患者さんと接する時に、放射線だけでなく、“病気よ、よくなーれ”という、プラスのオーラも照射しているのだろうと、インタビューの受け答えからイメージしてしまいました。

◆渡辺さんのプロフィール

職業： 診療放射線技師

所属： ピンクリボンブレストケアクリニック表参道

(<http://www.pinkribbon-breastcare.com/>)

◆診療放射線技師とは？

(13歳からのハローワーク公式サイトから抜粋しました)

病院など医療施設で、レントゲンやCT スキャン、MRI などの医療機器を操作する。医師の指示に従って、治療に必要な患部の映像を撮影する。エックス線などの放射線は、扱い方

によっては人体に大きな危険をおよぼすため、専門的な知識と、それに裏付けられた確かな技術が不可欠となる。また最近では医療機器もコンピュータ化が進み、操作法もより複雑に、高度になってきている。新しい技術や医療機器にすぐに対応できるだけの適応力や好奇心、向学心なども必要だ。診療放射線技師になるためには、養成コースをもつ専門学校や大学などを卒業し、国家試験を受験しなければならない。試験に合格した後、診療放射線技師を募集している医療機関に就職するのが一般的だ。

◆診療放射線技師に求められる能力

平常心：手術などに立ち会っても冷静でいられる能力

明るさ：人生いろいろ、くよくよしない心持ち

思いやり：患者さんの立場に立った対応力

専門知識：進歩する機械装置の取り扱い方や医療技術への見識

専門技能：知識を駆使した発揮能力